

2018年10月19日

中野区長 酒井直人 殿

中野区役所内 文化・スポーツ分野 文化財担当 殿

美術評論家連盟
会長 南條史生



旧中野刑務所正門保存に対する意見書

中野区新井三丁目・旧法務省矯正管区敷地の平和の森小学校移転用地としての取得にともなう、後藤慶二設計による旧中野刑務所正門の保存検討の報を受け、本連盟は下記の理由をもって、現地保存を強く求めます。

芸術の擁護、継承、発展を願う本連盟として、この作品が備える社会的、歴史的な希少性と重要性に対する公的な処置に高い関心を抱いております。もとより全体が保存されるべきであった建築の解体を経て辛うじて残されたこの正門をも解体する余地が検討されること自体に、本連盟は危機感を持っております。所管機構の賢明な配慮と善処を要望いたします。

記

1 後藤慶二顕彰の場としての意義

後藤慶二は、日本近代建築史上最大の天才とみなされている世界水準の建築家です。夭折してしまっただけでなく、後藤の作品で現存するのは唯一この旧中野刑務所正門のみです。

建設後 100 年を経過したこの重要な史蹟を短期的な都合によって解体することは、例えば帝国ホテルの解体が文化破壊の例として国際的に語られているように、取り返しのつかない事態につながります。

建築を工学のみならず精神をも構造化するものと捉える後藤の理論的著作は、当時のみならず、現在の文学や哲学の議論にも示唆を与えるほど射程の深いものです。作品の規模、思想、理論、そしてその徹底において、後藤はアムステルダム派を代表する（後藤とほぼ同年生まれの）マイケル・デ・クラークを凌ぎます。近代建築史の始まりの時期にいきなり国際水準の頂点に匹敵するような理論を實踐し得たのは、後藤の圧倒的な才能と知性によります。加えて、そもそも画家を志していた後藤は生涯、画業をも続け、すぐれた絵画の仕事をも残してあります。後藤の存在によって始めて、工学と美学の統合された建築という概念の実現が示されたのです。

2 建築史的価値

旧中野刑務所は、日本の建築史に刻まれたフランク・ロイド・ライトの帝国ホテルや、世界遺産であるル・コルビュジェの国立西洋美術館などにも劣らない建築史的価値をもっていたと言え

ます。建築史的に言えば、20世紀初頭の近代主義の出発点にあった有機的建築理論のもっとも充実した例です。明治近代国家成立期の外観を重視した儀礼的な洋館から、建築の機能を内的構造として人間の身体統御と統合しようとした最初の事例であり、この機構を、外観に拠らない有機体建築理論の本質に結びつけて展開し得た世界的にも例を見ない傑作です。

建築の全体が保存されていれば、富岡製糸工場や軍艦島と並んで世界遺産になれるほどであったでしょうが、正門だけであっても、その重要性和価値は劣るものではありません。

3 文学史や思想史との関わり

門を残すことに、小学校や周囲の環境にふさわしくない等の意見がもし出たとしても、それには反論しなくてはならないでしょう。なぜなら建築としてのみならず、多くの文学者、哲学者も収容された旧中野刑務所が歴史的に重要な意味をもつことは明らかのためです。解体の検討の背景には、もしや監獄という負の歴史を一掃したい意向もあるかもしれませんが、今日ではむしろこのような場所を含めて歴史を学ぶ場こそを保存し、人を誘致する運動が高まりを見せています。その意味で旧中野刑務所は富岡製糸工場や軍艦島と同じ文化的意義——見学価値を持つものです。また視点をかえれば、たとえ収監という負の意味があったにせよ、旧中野刑務所に収容された大杉栄は当時最新のこの建築が読書に最適な場となっていることを賞賛していたり、村山知義がこの刑務所を舞台に名高い小説「白夜」を著してもいます。あるいは、芥川龍之介はこの建物が建設された当時、「僕に中世紀を思ひ出させるのは厳めしい赤煉瓦の監獄である。若し看守さへみなければ、馬に乗ったジアン・ダアクの飛び出すのに遇つても驚かないかも知れない」。(『都会で——或は千九百十六年の東京——』)と記述していました。いずれにしてもここは文学、思想的にも生きた歴史を刻み込んだ場所であるということです。

4 観光資源としての価値

中野区に隣接する新宿区下落合では、佐伯祐三、中村彝、林芙美子らの住居などが保存あるいは復元され、区民のみならず区外の市民にも親しまれ、名所になっています。さいたま市では、まさに後藤慶二を尊敬し憧憬していた詩人・立原道造による実験住宅ヒヤシンスハウスが2004年に再建されて大きな評価を獲得し、つねに来訪者に恵まれています。

旧中野刑務所および後藤慶二の重要性にもかかわらず、その存在が知られなくなっていたのは、こうした新宿区やさいたま市、もしくは池袋モンパルナスを擁する豊島区のような地域縁の史蹟に対する調査や広報が活発でなかったからかもしれません。今回の保存検討を機会に、建築史的、文化史的な議論がなされれば、高い関心を集め、ひいてはこの建築が広く人を呼ぶ観光資源になるはずです。上述した住居などよりも、公的な建物にして建築史的評価も影響力もはるかに大きなこの正門の現地保存は、中野区の価値向上に資するにちがいません。

以上